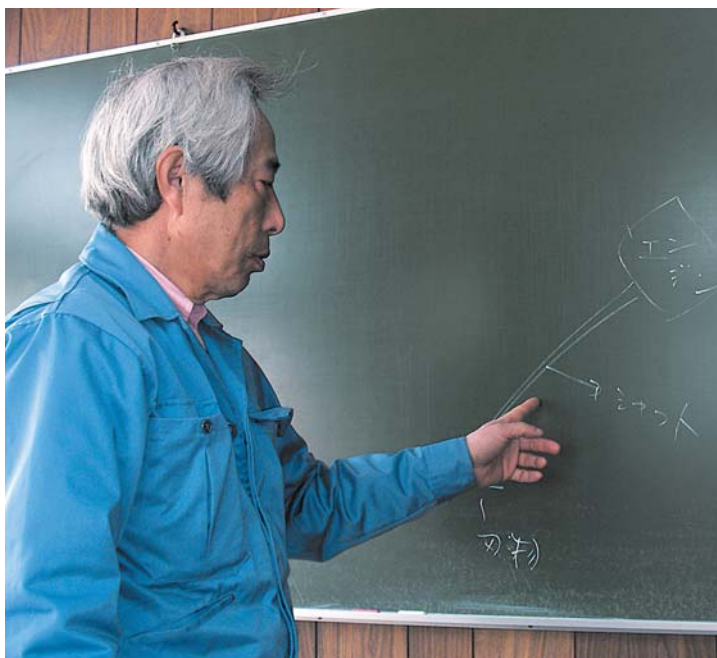


女性や高齢者にも使いやすい 小型軽量の雑草刈り機を開発



代表取締役社長・井本氏。「センターには、刃物を製造するときの熱処理のノウハウなどについて専門的な指導や助言をいただいていた」と話す。

カンナの刃の製造にはじまり、農業用機械の刃物、部品などを手掛けるイモト。古くから、製品の品質向上のために兵庫県立工業技術センター機械金属工業技術支援センターと関係をもってきたが、共同研究に踏み切ったのは、自社ブランドの製品開発のため。雑草刈り機（刈払機）を開発し事業の転換を目指した。

成果品



完成した小型・軽量の新型刈払機（雑草刈り機）。軽量車輪による走行で安全性を確保し、女性でも安心して使える。地場産業の刃物という地域の「ものづくり力」を活かした開発事例だと言える。

地場産業の機械用刃物にかかわる 企業としてセンターにふれあう

「兵庫県立工業技術センターとのおつき合いは古いです。当社だけでなく、地元の技術系の企業は昔から、困ったことがあるとセンターに相談していたものでした。『指導所』と呼んでいて、身近な存在だったんです」と話す代表取締役社長・井本氏。兵庫県三木市は地場産業として大工道具をつくらっていた町。同社もカンナの製造から創業された企業だ。いつしか業務の主体が農業用機械の刃物、部品にシフトしてからも、センターとの関係は続いていた。

機械の刃物部分が、作業中に割れるケースがまれにあり、事故防止のために刃物の品質を高め、安定させる研究などを、センターの助けを借りて行なってきた。センターの試験を受けて品質が保証されていれば、万一の場合もそれが偶発的な事故であって品質の問題でないことが主張できる。

自社ブランド製品の開発を 目指して共同研究をスタート

そんな同社が、一歩進んで、新製品開発に取組みはじめたのは「自社ブランドの創造」を目指したからである。現状、売上の9割が、機械メーカーから刃物部分のアウトソーシングを受けることによるものだった。カンナの時代から蓄積した刃物づくりの技術には定評があるが、アウトソーシングゆえの不安定さを払拭するために自社製品を持ちたいという思いは常にあったという。そんなとき、懇意にしていたセンターの研究者から、機械そのものを含めて開発してみないか、という話を持ちかけられたのだという。

そしてセンターとの共同研究という形で開発されたのが、新型の刈払機（雑草などを刈る機械）だ。コンセプトは女性や高齢者にも使いやすい機械。普及しているエンジンを背負うタイプなどは女性や高齢者に負担が大きいことに着目した。

センターによる事例報告書。企業との共同研究の成果としてセンターからもPRされている。



「なにか悩んだり疑問に思うことがあれば、まずセンターに相談するといいでしょ」と井本氏。

小型で軽量、分解できるなど さまざまな工夫を盛り込んで開発

新型刈払機の最大の特徴は、軽量であること。部品点数を少なくすることで総重量を7kgにまで軽減した。

また、自走式と手押し式の中間的な機械で、余分なものを削ぎ落としたぶん、販売価格を安くできるという点も優位性。他にも、小型でも車輪の3倍の幅を刈れる、組み立て・分解収納式で運搬が便利、など、使いやすさと安全性にこだわった。農作業に従事する人の高齢化が進む傾向にある中で、高齢者にも安全で使いやすい機械の需要はあると見ている。

「比較的、安定した地面の上で、背の低い草を刈るのにもっとも適しています。ですからゴルフ場や、公園、一般家庭の庭の芝生を刈るのに利用できると思います」と、新たな市場開拓にも期待している。

さらなる製品改良と、商品化に向けての取り組みを続行中

しかし課題もある。刈払機は、原価の7割がエンジン部分の価格である。同社はこの部分を自社で製造する機能を持たない点がネックになっている。製品として量産するには大量のエンジンを仕入れる必要があり、在庫を抱えたときのリスクが大きい。

また、製品自体にもまだ改良の余地があるという。得意先企業などに完成品を見せようなどして意見を聞いているが、草を刈った後の処理の仕方などを改善したほうが良いという声があがっている。

「今も、センターには製品改良の取組みに協力してもらっています。当社がカンナの刃から機械の刃物、部品へと転換してきたように、次の転換期へのキッカケに、この開発がつながるものと希望を持っているんです」

企業情報

- 社名 / 株式会社イモト
- 代表者 / 代表取締役社長 井本洋
- 住所 / 〒 673-0434
兵庫県三木市別所町小林 657 番地
- E-mail / info@kabu-imoto.co.jp
- URL / http://www.kabu-imoto.co.jp
- 事業理念 / 木工カンナ製造業として創業。その後、各種刃物の製造へ業務を広げ、コンバインや刈払機など農業機械用の刃、高枝バサミ、剪定鋸など園芸用刃物、各種カッター刃物などを取扱う。同社の理念は創業者の言葉「玄関の土 この土を社員が踏みお客様が踏んで下さるから我が社が存在するのだ」にあらわされている。市場を満足させる製品の提供を通じて、日本一の刃物・先端工具を製造し、研究し、サービスする会社になることを宣言している。



公設試情報

兵庫県立工業技術センター
機械金属工業技術支援センター

成功までのプロセス

- 1ステップ 1980 ●刈払機用丸鋸（チップソー）についてJIS所得を取得。兵庫県立工業技術センター機械金属工業技術支援センターの協力を得た。センターとのつながりが深まった転機で、これにより丸鋸に関するクレームなどは激減。
- 2ステップ 2003 ●新型の刈払機の開発に、センターと共同で着手。高齢者でも使いやすい小型で軽量の機械の開発を目指して研究をスタートする。
- 2004 ●部品数を少なくし、総重量7kgの刈払機が完成。
- 3ステップ 2006 ●製品の、後処理部分の改良について引き続き研究開発に取組みながら、商品として販売するための体制づくりや販路などを開拓中。